

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一10:23～11:1 「何をするにもただ神の栄光を」

[23]「すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが有益とは限りません。すべてのことはしてもよいのです。しかし、すべてのことが徳を高めるとは限りません」クリスチャンの自由とは自己中心や快樂追求、でたために生きることの口実として用いられるべきではなく、有益なこと、徳を高めること、キリストのからだなる教会の形成のために用いられていかなければならない。

[24]「だれでも自分の利益を求めないで、他人の利益を心がけなさい」これこそキリストが私たちのために示してくださった生き方であった。

[25-26]「市場に売っている肉は、良心の問題として調べ上げることをしてしないで、どれも食べなさい。地とそれに満ちているものは、主のものだからです」

たとえ市場で売られている肉の中に偶像の宮にささげられた肉が混じっていたとしても、それを買って食べることは問題ない。なぜなら、それは悪霊が支配する偶像の宮ではなく自分の家庭においてであるから。そして地とそれに満ちているものは、主のものであり、それらはすべて主なる神ご自身が創造されたものであり、もともと汚れてはいない。偶像の影におびえる必要はないのである。

[27-28]「もし、あなたがたが信仰のない者に招待されて、行きたいと思うときは、良心の問題として調べ上げることをしてしないで、自分の前に置かれる物はどれも食べなさい。しかし、もしだれかが、『これは偶像にささげた肉です』とあなたがたに言うなら、そう知らせた人のために、また良心のために、食べてはいけません」

パウロは原則を大胆に主張するが、個別の状況においては細心の注意を払う。クリスチャンが未信者の家に招かれて出されたものは何でも詮索しないで食べても良い。しかし、「これは偶像にささげた肉です」と知らされた場合は食べてはいけないと言う。ここで、そのように知らせた人とは、そのような肉を食べるべきではないと考えていたいいわゆる弱いクリスチャン(8:9,ローマ14:1)のことであろう。そのような兄弟を悩ませ、不安がらせるくらいなら食べない方がよい。このようなパウロの細心の心遣いに私たちは学ばなければならない。

[29-30]「私が良心と言うのは、あなたの良心ではなく、ほかの人の良心です。私の自由が、他の人の良心によってさばかれるわけがあるでしょうか。もし、私が神に感謝をささげて食べるなら、私が感謝する物のために、そしられるわけがあるでしょうか」

強い人は弱い人の良心に十分な配慮をしなければならない。パウロがここで「あなた」と言っている相手は、強いと思っているコリント人たちのことであろう。彼らは弱いクリスチャンをつまずかせないようにしなければならない。しかしパウロはここで、彼自身の自由は他の何ものによってもさばかれることはないと言う。30節にあるように、神に感謝の祈りをもって食べる物を、誰もそれを汚れているとか、偶像にささげたものだとか言ってそしることはできない。それは神にあってきよめられているのである。彼はこのような確信を持っている。

[31-32]「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。ユダヤ人にも、ギリシヤ人にも、神の教会にも、つまずきを与えないようにしなさい」

クリスチャンは食べる、飲むというような特定の行為だけではなく、その生活のすべての面において、神の栄光を現すという目的をもって生きなければならない。これこそキリスト者の人生の大目的である。そして私たちの生き方が他のすべての人々、そして神の教会にもつまずきを与えることがないように心がけなければならない。

[33-11:1]「私も、人々が救われるために、自分の利益を求めず、どんなことでも、みなの人を喜ばせているのですから。私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください」

パウロは、「私も…」と言って彼自身そのことを実行し生きた模範を示している。彼の伝道者としての目的は、「人々が救われるため」であった。そのために自分自身ではなく多くの人のために生きている。それはまた、キリストが歩まれた道であった。同じように彼は読者であるコリント教会の人々、そして私たちに向かって、「あなたがたも私を見ならってください」と力強く勧めるのである。